

機関番号：32718  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20530490  
 研究課題名（和文） 基底意識構造の統計科学的研究－素朴な宗教的感情と生活に関する連鎖的比較調査分析－  
 研究課題名（英文） A Study of Statistical Science on Structure of Basic Consciousness --- Cultural Link Analysis concerning Religious Feelings and Daily Life ---  
 研究代表者  
 林 文（HAYASHI FUMI）  
 東洋英和女学院大学・人間科学部人間科学科・教授  
 研究者番号：00180977

## 研究成果の概要（和文）：(200字程度)

本研究では、国際比較を視野に、日本人の素朴な宗教的感情などの基底意識構造を、広く生活全般の価値観の中に捉えるため、国内の限定地域において郵送調査とウェブ調査を綿密な実施計画のもとに行った。郵送調査の低回収率による偏り、ウェブ調査の回答集団特性の差異による偏りなどを十分考慮し、連鎖的比較調査分析の視点で解析を進めた。比較した調査間では、属性やIT使用関連の状況の差異の大きさに比べ、素朴な宗教的感情など基底意識に関する回答の差は小さかったが、差の傾向から今後の研究への示唆を得ている。

## 研究成果の概要（英文）：

With the possibility of use in future international comparative projects in mind, we conducted mail and web surveys in certain geographically restricted regions in Japan under a carefully designed, systemic research plan. Our aim was to locate the underlying mental structure of Japanese people with regard to such things like visceral religious feelings and sentiments within the context of everyday life and the values that support it. We applied the perspective of the Cultural Linkage Analysis in analyzing the data, being cautious in accounting for any possible bias stemming from the low response rate in the mail survey and from the variability among respondents across the web surveys whenever possible. Across the data sets that we comparatively analyzed, we found that variations in responses to the items related to the underlying mental structure such as visceral religious feelings were smaller than those observed for attributes and differences in the patterns of IT use; we were able to obtain useful insights for future research from the patterns in which these variations emerged.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：統計科学、社会調査、社会学

科研費の分科・細目：社会学、文化・宗教・社会意識

キーワード：統計科学、日常生活価値観、宗教的感情、社会調査、インターネット調査、ウェブ調査、郵送調査

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1953年からの「日本人の国民性調査」(統計数理研究所)とこれに関連する意識調査、「日米欧7カ国調査」(林知己夫・林文他, 1998)や1971年からの海外の日系人調査をとおして、蓄積されたデータは世界的にも貴重な資料として認められている。この長い研究の中から、「連鎖的比較調査分析 (Cultural Link Analysis)」と呼ばれる方法論が発展した。さらに、国際比較における調査項目や質問の仕方、また様々な質問群の作成に、独自の方法論が取り入れられ、調査から分析までの実践的パラダイムとして「データの科学」が提唱され、新たな統計学の分野を確立しつつある。

「連鎖的比較調査分析法」は、故林知己夫を中心に「日本人の国民性調査」から発展させてきた国際比較方法論である。「意識の国際比較調査」として行われた日米欧7カ国国際比較調査の分析結果や、その一環として行われた東アジア価値観国際比較調査から、東アジアにおける信頼感などの人間関係の同異の姿や連関の社会文化的側面が明らかになってきた。それらを通して、宗教的感情や生活に対する考え方や行動など、東アジアの中でも文化差があることを示唆してきた。そしてこのような生活に対する考え方の問題は、独立した問題として捉えるのではなく、Life (宗教観、生命観、人生観、生活の質)として捉え、文化的要因の影響等も含め、広く人々の生活全般の状況とその要因から考察することが重要という認識に至った。

(2) 近年、WHOでもスピリチュアリティの重要性が注目されるなど、宗教の概念の見直しもなされるようになってきている。しかし、そのための調査をみると、西欧的論理から構築された概念を用いており、日本人が宗教的な心として捉えるものとは違った印象を受ける(林他, 2004, 林, 2006)。日本人の宗教的な心にあたるものが日本以外の国や地域で存在するのか、存在するとすれば、どのような言葉で捉えることができるのか考えていく意味がある。

## 2. 研究の目的

日本の「素朴な宗教的感情」とLife(宗教観、生命観、人生観、生活の質)の洞察をさらに深め、文化の連鎖を日本のみならず他の地域へと、大規模な標本調査に基づく統計科学的実証的調査研究により、解析を発展させていく必要がある。調査から分析までの実践的パラダイムとしての「データの科学」の視点に立って、連鎖的国際比較を視野に、本研究では、日本における「素朴な宗教的感情」を生活の中に捉え直すことを目的とする。実施する調査は、地域を限定した郵送調査とウェブ調査である。ウェブ調査は、学術的研究

の遅れた調査法といえるが、あえてそうした調査法を適用する意味は、ウェブ調査による「素朴な宗教的感情」等の回答の様子を捉えながら、ウェブ調査そのものの研究に貢献することにある。単に郵送調査との結果の比較だけでなく、ウェブ調査そのものの研究の視点でそれぞれの調査の特質を把握しながら回答の比較を進める。

## 3. 研究の方法

基底意識構造を広範な観点から考察するため、宗教的感情と生活に関する連鎖的比較調査分析を念頭に、既存の調査の再検討を行って調査票を完成させ、郵送調査、ウェブ調査を遂行する。遂行した複数の調査結果について、各調査の諸条件を踏まえて比較し、解析する。

(1) 郵送調査 2008年度は横浜市の一部地域住民を対象に郵送調査を計画した。調査票は、統計数理研究所の国民性調査や環太平洋価値観比較調査等の分析を踏まえ、調査内容を充実させ、多面的・多次元の分析を念頭に再検討した。

(2) ウェブ調査 2009年度、実施機関3社の協力を得て、ほぼ同じ質問票形式、ほぼ同様の調査条件により実施した。ウェブ調査の実施条件は次のとおりである。

a. 調査対象エリア：首都圏（埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県）

b. 対象者：抽出枠は委託先各社の（あるいは提携社の）保有する登録者集団（パネル）で、パネル登録情報により調査対象エリアに居住する20歳～69歳の男女。

c. 調査期間：2010年2月19日（金）10:00～2月25日（木）10:00。

d. サンプル数：目標回収標本数を全体500、性別×年齢層別（10歳きざみ）の住民基本台帳統計の構成割合によって各層の回収目標数を割り当てるクォータ法。その回収目標数を得られる計画標本数を各社それぞれで設定し、調査依頼を発信した。

e. 回答収集方法：常時オープン型（調査期間内は常にオープンしておき、回収目標数に達しても閉じない方式）とする。なお、性別×年齢層別の各層で、回収目標数に達しない場合はその層に再度調査依頼を発信した。

f. 調査項目と調査票設計：71問（素朴な宗教的感情に関する項目、一般的社会意識、属性、インターネット利用関連質問）を質問文と回答選択肢、その配置、頁区切りも統一して7頁、頁内はスクロール式とした。フォントや色などは各社の方式による。

g. 回答謝礼：各社の通常の基準による。

h. 納品：各社のパネルの情報、計画標本の抽出情報、計画標本全体のトラッキング情報、回収標本についての回答とパラデータ

情報。その他、実査手続きの説明、実施状況の報告。

ウェブ調査と比較する郵送調査は、別資金により、ウェブ調査のほぼ1カ月後に実施された。郵送調査の実施概要は次のとおりである。

- a. 調査対象：ウェブ調査と同じ首都圏
- b. 対象者抽出：住民基本台帳からの層化2段無作為抽出法による20歳～79歳の男女、1500人（60地点×25人）。
- c. 調査期間：3月8日～3月19日（依頼状の投函締切、実際は4月9日返送まで受け取り）。
- d. 調査項目と質問票設計：ウェブ調査と形式を可能な限り揃えA4サイズ8頁。
- e. 発送はA4の入る封筒、返信は3つ折りで入る定形とし、料金受取人払い。
- f. 回答謝礼なし。

調査結果からウェブ調査についてはパネル情報と回答者情報とともに集計し、回答率比較表を作成、郵送調査についてはウェブ調査と年齢調整したものとも比較した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 2008年度横浜市4区調査による知見

2006年度の隣接する地域の同じく郵送調査と比較すると、信仰を持つ割合が少なくなっており、地域差というべきか、安易な解釈は避けたい。この調査で初めて試行した、お墓に関する考え方をみると、先祖を尊ぶかと信仰との関係は強いものの、お墓を守るという考えは信仰とはほぼ無関係で、むしろ信仰を持たないが宗教的な心は大切とする人々がお墓を守るという回答割合が高い。信仰なしで宗教的な心は大切という考え方の追求の重要性を確認した。

これは次年度のウェブ調査との比較を念頭においたものであったが、2009年度は調査地域を首都圏に拡大することとなり、新たな郵送調査を別資金で実施できることとなったが、2008年度調査は単なる比較ではない意味で重要である。

##### (2) 首都圏郵送調査と3調査機関によるウェブ調査の比較

各質問項目選択肢の選択率を2調査間で比較した。属性項目と主質問項目は分けて考える必要がある。まず、郵送調査のウェブ調査Aとの相関図は図1a、1bのとおりである（対角線を囲む線は、回収標本が単純ランダムサンプルとみなした場合の95%信頼限界）。属性項目で大きな違いがみられるが、主質問項目における選択率の差はそれほどではないことがわかる。ウェブ調査では、回答制御を行ったことで発生しない「無回答」が郵送調査では若干あり、全体的にウェブ調査の方が、選択率が高い傾向を示す。

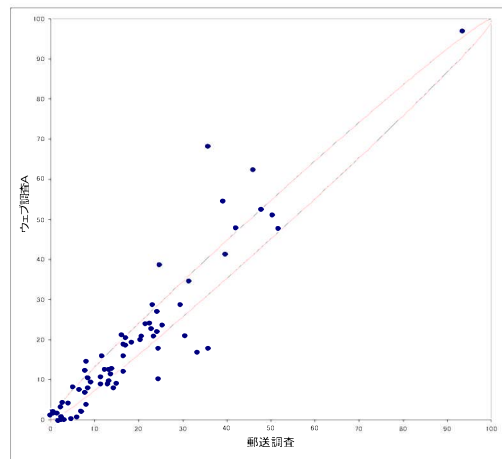


図1a 郵送調査とウェブ調査A（属性項目）

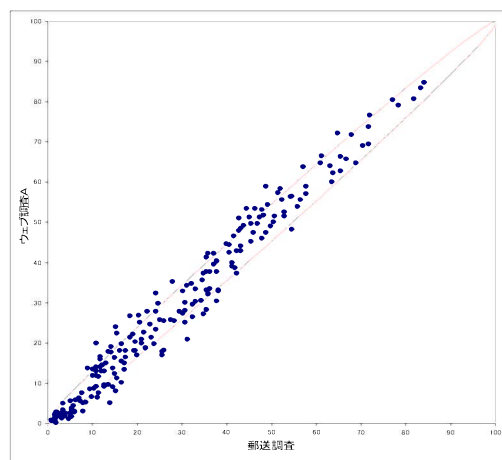


図1b 郵送調査とウェブ調査A（主質問項目）

ウェブ調査A、B、C間の相関は図2aと2b、3のとおりである。ウェブ調査BとCは属性項目の回答も近い。

属性項目の回答選択率の差は、それぞれの調査の回収標本の特徴であり、2つの調査間でそれぞれの項目選択肢で選択率を比較し、5ポイント以上の差がある回答選択肢に注目してみた。属性に準じた内容の質問項目として、生活水準に関する項目、階層意識について見たところ、郵送調査回答者は生活水準の見方がネガティブで、ウェブ調査Aの回答者は、生活水準についてポジティブで、生活満足度もやや満足が多く、ウェブ調査Cの回答者は、生活満足度は不満・やや不満が多く、階層意識は下・中の下が多い傾向がある。

伝統的な行動については、郵送調査が最も肯定的であり、ウェブ調査Aはこれに近くCが最も否定的な傾向が読み取れるが、一方、素朴な宗教的感情についてはウェブ調査Aで関心が高い傾向もある。またウェブ調査Cは社会との関連においては懐疑的である。

ウェブ調査の結果は、予想通り属性項目で大きな差がみられた。それに比して、主調査

項目については各社で驚くほどの差は見られなかったが、差をよく見ていくと属性の特徴と合わせて解釈ができる。

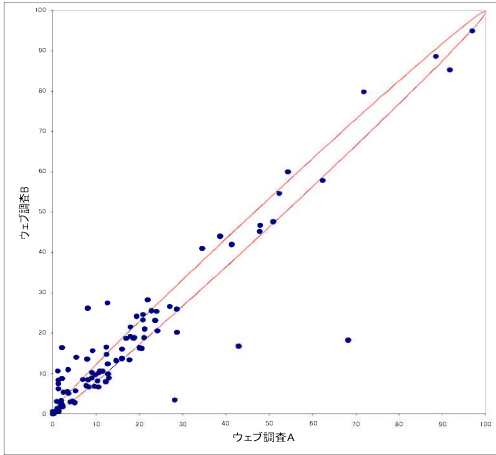


図2a ウェブ調査AとB（属性項目）

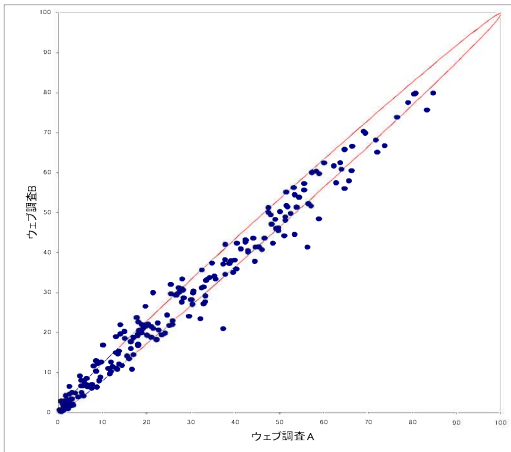


図2b ウェブ調査AとB（主質問項目）

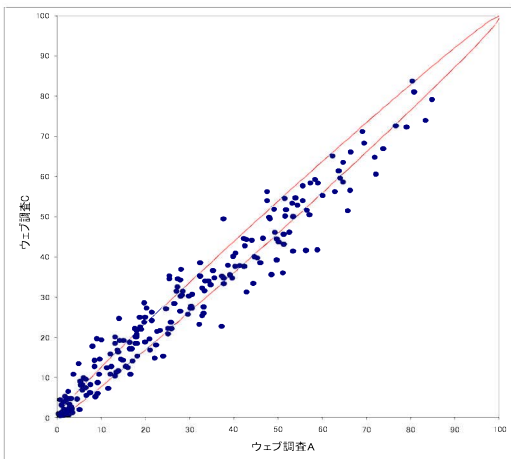


図3 ウェブ調査AとC（主質問項目）

全体的に主質問項目選択肢について、選択肢  $k$  の、ある2調査  $i$  と  $j$  の回答選択率の差

を  $k$  について合計した  $d_{ij} = \sum |p_{ik} - p_{jk}|$  を調査間の距離として捉えてみた(表1)。

2009年度の4つの首都圏調査は、郵送調査 → ウェブ調査A → ウェブ調査B → ウェブ調査C の順に距離が離れていることがわかる。ウェブ調査Aが郵送調査に近いのは、登録者勧誘の方法が他2社と異なり（非公募型）、他2社（B、C）のような自己参加型（公募型）でないためと考えられる。

なお、2008年度の横浜市4区調査は、首都圏調査の郵送調査と最も近いわけではないが、ウェブ調査Cと最も離れていることは共通している。

表1 各調査の回答差からみた距離

	ウェブA	ウェブB	ウェブC	郵送調査
ウェブA				
ウェブB	519.8			
ウェブC	767.2	424.2		
郵送調査	627.1	742.9	889.9	
横浜市4区				
郵送調査	718.8	764.7	900.0	739.0

大まかにまとめると、伝統的な行動については、郵送調査が最も肯定的であり、ウェブ調査Aはこれに近くCが最も否定的な傾向が読み取れるが、一方、素朴な宗教的感情についてはウェブ調査Aで関心が高い傾向もある。「信仰あり」の回答は、郵送調査で最も高い割合ではあるが、20%にすぎない（ウェブ調査Cの14%との差6ポイントが最も大きい）。また、「宗教的な心は大切」は郵送調査で63%、ウェブ調査Cで55%、という差がある。「信仰の有無」と「宗教と宗教的な心を大切と思うかどうか」の回答を組み合わせた群別「信仰あり」「信仰なし・宗教的な心大切」、「信仰なし・宗教的な心大切でない」、「その他」の、「信仰なし・宗教的な心大切でない」の割合は、郵送調査では23%、ウェブ調査AとBは31%、ウェブ調査Cは38%と、その違いが顕著である。

一般的生活意識では、ウェブ調査Cは日本の伝統的な考えに否定的であり、社会とのつながりが薄いと考えられるような傾向が読み取れる。

### (3) 総合考察

まず、ウェブ調査の特徴として見えたのは、3調査機関で回答が異なるものが、属性、特にインターネットなどに関する行動や実態に大きな違いがあるのに比べて、素朴な宗教的感情についての結果は、それほど大きくは違ってないことがわかった。しかし、属性の特徴とも呼応するのではないかと解釈できる差はあり、そうした意識の捉え方に違いがあることも示唆されている。

様々な身近な生活意識と信仰の有無と宗



教的な心は大切かの考え方との関連を見ていくと、信仰や宗教的な心は大切という考えは年齢が高いほど多い一方、若い年齢層は宗教という言葉に対しては拒否的ではあっても、死後の世界や霊の存在を否定できない。これが宗教的と言えるかどうかは論議があるが、素朴な宗教的感情といえるのではないかと考えられる。年齢別だけでなく、なんらかの区分（例えば合理-非合理）があるのかもしれない。

素朴な宗教的感情は教義宗教以前のもではなく、この個人化の進んだ現代の人間の新たな求めでもあるとみることもでき、そうしたものを肯定的に捉えていく必要がありそうである。スピリチュアリティや精神性・零性などの言葉で捉えようとしていることと一致するのか、日本と海外で共通することは何か、違いは何かなど、今後の研究につなげたい。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計7件)

- ① 林 文、健康観・死生観と宗教的な心、W'Waves、Vol.14、No.1、2008、35-38
- ② 林文・小谷みどり、宗教的な心について—環太平洋価値観調査から—、日本行動計量学会第36回大会(抄録集)、2008、69-70
- ③ Hayashi, F. and Nikaido, K., Religious Faith and Religious Feelings in Japan: Analyses of Cross-cultural and longitudinal surveys、Behaviormetrika、Vol.36、No.2、2009、167-180
- ④ Hayashi, F., Japanese Religious mind in daily life - based on East-Asia Value Surveys, "Culture, Society, Economics and Environment in Modern East Asia" Program and Papers、2010、65-58
- ⑤ 林 文・二階堂晃祐、宗教的な心の国際比較に向けて—2008年インド調査を踏まえ、環太平洋価値観調査から—、第28回行動計量学会大会抄録集、2009、188-189
- ⑥ 林 文、現代日本人にとっての信仰の有無と宗教的な心—日本人の国民性調査と国際比較調査から— (研究ノート)、統計数理、第58巻第1号、39-59
- ⑦ 林 文・大隅昇・吉野諒三、ウェブ調査から何を読み取るか—基底意識に関する実験調査—、日本行動計量学会第38回大会抄録集、2010、30-33

[学会発表] (計4件)

- ① 林 文・小谷みどり、宗教的な心について—環太平洋価値観調査から—、日本行動計量学会第36回大会 (特別セッション: 環太平洋(アジア・太平洋)価値観国際比較調

査)、2008.9.3、政経大学

- ② 林 文・二階堂晃祐、宗教的な心の国際比較に向けて—2008年インド調査を踏まえ、環太平洋価値観調査から—、日本行動計量学会第37回大会、2009.8.6、大分大学
- ③ Hayashi, F., Japanese religious mind in daily life: based on East Asia Value Survey、International Symposium on Culture, Society, Economics and Environment in Modern East Asia、2010.3.31、同志社大学
- ④ 林 文・大隅昇・吉野諒三、ウェブ調査から何を読み取るか—基底意識に関する実験調査—、日本行動計量学会第38回大会、2010.9.23、埼玉大学

[図書] (計3件)

- ① 吉野諒三・林 文・山岡和枝、国際比較のデータの解析—意識調査の実践と活用、朝倉書店、2010、208頁
- ② 林 文・吉野諒三、伝統的価値観と身近な生活意識に関する意識調査報告書—郵送調査と各調査機関のWEB調査の比較—、統計数理研究所、2011、223頁
- ③ 林 文、伝統的価値観と身近な生活意識に関する意識調査報告書—別冊、2011、84頁

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 文 (HAYASHI FUMI)

東洋英和女学院大学・人間科学部・教授

研究者番号: 00180977

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

吉野 諒三 (YOSHINO RYOZO)

統計数理研究所・データ科学研究系・教授

研究者番号: 60220711

山岡 和枝 (YAMAOKA KAZUE)

国立保健医療科学院・技術評価部・室長

研究者番号: 50091038

松本 渉 (MITSUMOTO WATARU)

統計数理研究所・データ科学研究系・助教

研究者番号: 10390585

(H22より 関西大学・総合情報学部・准教授)

研究協力者

大隅 昇 (OHSUMI NOBORU)

統計数理研究所・名誉教授

研究者番号: 80000206